二次創作　艦これ　Mermaid

朝馬手紙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現在、日本と深海棲艦が戦争中。その真っただ中主人公と深海棲艦が無人島で出会う…。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 6
第三話 …… 10
第四話 …… 13
第五話 …… 17

第一話

両腕を切り落としたかった。艦船の作業は想像以上に油の匂いが身体に付く、というレベルではなかった。何を口にしようと、潮風に吹かれようとも自分の体から発する火薬と油の匂いだけは鼻に突き刺さってくる。自分の両手を鼻に近付けた時、クラッと意識が遠のく感覚がして、戦争中というのに青年は何もかも諦めて笑ってしまった。

「ぎゃあああああ」

何処かで誰かの悲鳴が聞こえてきた。その後すぐに甲高い警報が鳴り響き総員持ち場についた。

青年がいた場所は甲板のすぐ下にある通路で、万が一火災など起きた場合は彼らが消火器を火元まで駆けつけて鎮火するよう命令が出される。…はずだったが「敵」の数が予想以上だったのと奴らの緻密な作戦により日本軍の全艦隊のほぼ全てをその一瞬にして海の底へと消えてしまった。

西暦２???年８月２０日　午後３時５２分　日本海上殲滅軍　壊滅

死者　５８４８名　　行方不明者　１名

深夜、一人の青年がどこかの島まで泳いでたどり着いた。あの瞬間、爆風と下から燃え上がってきた炎に体が叩きつけられ、一人意識が薄れていく中、足を引きずりながら、なんとか外へ出ると更なる地獄が待っていた。「敵」が人間を殴り殺している様を、奇跡的に生き延びた今でも鮮明に思い出される。

「…ここは…どこだろう…？」

逃げる時に右肩を撃たれて動けそうになかった。もし無人島なら死体になるまで時間はかからない、気がしていた。仰向けになって夜の星座を観察してみる。自分がどこにいるのか、少しでも分かれば生

き残る未来が見えてくるはず。
「大丈夫…デスカ…？」
綺麗な月明かりがぼんやりと映す姿は、「敵」だった。「深海棲艦」という別称があったなーなんて考えている場合ではない。ボロボロの体を叩き起こして彼女に拳銃を向ける。正直、膝が震えて止まらないことが相手にも伝わっているかもしれない。
「アノ…ゴメンね…」
脳裏に腕が引き千切られ甲板に頭を何度も打ちつけられてた仲間たちが…。気付けば人差し指はキュッと曲がっていた。ドスッと崩れ落ちていく彼女をはっきりと目に焼き付けながら、なぜか涙が止まらなくなって、その場に膝から力なく倒れるように「あぁ」という声を漏らした。
狙ったのは左目。次第に目が慣れてくれれば「敵」の死体が確認できるだろうと、思っていた。ぼんやりと浮かぶシルエットが少しだけハッキリとした形に変わっていく。と、同時に両腕の無い彼女の姿が目に映りこんだ。
「死にかけだったのか」
俺と同じだ、とかすれた声で嗤う。本当は拳銃には実弾なんて込められていなかった。新入りの若者に易々と資材の乏しい日本がホイホイ支給するわけがない。だから代わりに込めたのはゴム玉。実弾には劣るが眼球に当てれば失明くらいできるだろうと、万が一長期戦になれば敵の視界を奪うことで有利になれると判断したのだ。
なんで戦争してるんだっけ？先生が言っていた「敵だから」という理由にもならない答えだろうか。それとも知人が言っていた「アイツ等が殺しにくるから」だろうか。本当は深海棲艦は地球のどこにも住んでいるらしいし、日本の近海だけ野蛮な奴が集まっているのだろうか？どっちから殴ったのか？先に手を出したのは「敵」？それとも…
日差しが全身を照らしている。喉の渇きとか耐えられない空腹が体感できるから、自分はまだ死体ではないことを意外と冷静に把握できた。
「ア…オ、オハヨ…」

てめぇ生きてたのか！…と言いたいところだが何故か口に素手で鷲掴みした魚や果実を放り込んでしまっている俺。今度こそトドメを刺してやる！…と言いたいところだが食べ物を喉に詰まらせてしまい、彼女が慌てて海に蹴り飛ばれている俺。

気管に少し入るほどの水量を浴びる。水は水でも塩からくて水分が余計に恋しくなってしまった。

「ゲホッゲホッ、一応お礼は言っとくぞ」

ありがとう。

「エ、エットォ……エッと…」

両腕の無い彼女が真面な料理を出来るはずがなく、口にした魚は生だし、果実も皮が付いたままだった…。お陰で目が覚めた。

「おい、飯は済んだのか？」

キュルルル

サバイバルなんて実習生の時に散々させられたのでナイフは小型だが常に常備している。火は…根性でなんとかする。起きていきなりテキパキ作業を始めたが、まだ少し赤面している深海棲艦様を無視してもいいだろうか。何か色々と間違っているような気もするが、殺せたはずの俺を殺さない彼女に、こちらから手を挙げるのは気分が進まなかった。元々自衛隊志願だった身だ。「敵」だろうと命の恩人には少しだけでも何か返してやらないとな。

作業の途中、「ソノママデモ…イイ…」など言われもしたが、彼女が俺に聴くたびに何処かで腹の虫が鳴るので「はいはい」と答える、の繰り返しだった。

数分後、出来上がった料理は我ながら満足のいく出来栄えとなった。箸もその辺に転がっていた木の枝をナイフで削って調達。

「……」

「……」

そっと、魚料理を箸で掴む。断られたらどうしよう、とか考えずに行動に移ってしまったけれど、まぁいいか。流石に顔をまじまじと見ることはできなかったけれど、波の音に掻き消されない程の心臓の主張に自分自身少し困惑していた。

パクッ　パクッ　と互いに慣れてきたころ、今度は自分の腹が「オレもいるぞ」と呟く。箸をくるっと回して反対を使う。パクッパクッ、クルン、パクッと、リズムが取れてきたころ、作った料理が二人の胃袋に収まった。
本当に不思議な体験だった。殺し合いの戦争の最中、海に蹴っ飛ばされたり、あ～んしてあげたり、このまま悪い夢から覚めて、戦争も深海棲艦も、何一つ問題が起きてなくて平和だったらなと思ってしまう…。

夜、仰向けになって寝ようと目を瞑ってみたり、朝まで起きていようと星を数えてみたり。そんな特に普段と変わらないような頃、ふと聞いてみようと思い、口にした。
「なぁ、ニンゲンは嫌いか？」
頷いて欲しい気持ちは半分、予想以外の答えを聞きたい気持ちが半分。
「…ワカラナイ。デモ……カゾク…イナクナルノハ……イヤ」
まだ少し痛む右肩に触れる。自問自答をする。「敵」を殺すために戦っているのか、戦争を終わらせるために戦うのか。それとも…もっと別の何かが…。
「…ねェ」
ん？
「ワタシノコト……スキ？」
「…嫌いだよ」
でも、
「殺したくはない…かな」
漣が心地よく耳をそっと押さえてくれている、そんな気がする。何バカなことやっているんだ！と、誰かに怒られてしまいそうだ。彼女の質問も俺と同じくらいアッサリとしていて、無性に嬉しかった。
みんな同じように誰かが憎くて、力のない拳だとしても振り下ろせば相手は傷つく。同じような心臓の鼓動を打ちながら「敵」も真剣に人間を憎んでいるのだろう。

そして、二人は朝を迎えた。

第二話

ブロロロロロ
うるさいプロペラの音で目が覚めた。頭上でヘリがゆっくりと旋回しながら降りてくる。…!?ヤバい！隣でまだ眠っている彼女が見つかれば、きっとこの場で処刑される！
「おい！起きろ！えっと…」
あれ？そういえば名前を聞いていなかったな、と考えている暇もない！
「ン～？…ナ…ニ？」
ふわあ、と欠伸する彼女に説明する時間もないので、そのままお姫様抱っこで海に一緒に潜る。だがしかし傷口も完全に治っているわけではなく、塩水でビリリと染み渡る。
「ダイジョウブ!?」
「お前は早く帰れ！」
プスッと背中に何かが刺さったが、恐らく麻酔とか睡眠作用が効く針の類だろう。バシャンと一緒に浅瀬でこけてしまった。彼女だけでもなんとか…と思っていたら、
「ワタシ…『マリー』……ナマエ…デス」
彼女が何か覚悟した初めて見る表情、そのまま一人で進んでいく。が、空から網が降ってきて、響く彼女の悲鳴。
「ま、マリー!!」
今すぐ駆け出してその網を解いてやりたいが、既に麻酔が身体を回りだしていて指先しかうまく動かすことができない。胸を締め付けて破裂させんばかりの絶叫。
あ、あぁ…イヤだ。なんで彼女まで、マリーまで殺さなきゃいけないんだ…
すでに「敵」は戦う力も残ってないじゃないか…
次第に意識までも遠のいていく、舌を噛んでみても既に痛みも感じなくなっている。ただマリーの嫌がる声だけが聞こえていた。
こんな世界、もう嫌だよ。そして、瞼が、降りていった…

左腕には点滴、右側にある花瓶には綺麗な百合が飾ってあった。あれ？夢かな？と、天井を眺めながら少しずつ思い出して……え、え、ええああああああああああおおおおおああああああああああ!?ああ？あああ？

「どこだ！マリーはどこだ！」

知らない病院、おそらく政府の指定された重要な施設だろう。部屋には窓が付いておらず、どこにあるのか悟られないようになっている。地下にある施設だろうか？思ったよりスペースは狭く、叫ぶ声がギンギン響いてボルテージを加速させていく。

「てめえら全員ぶっ殺してやる！」

ガラッ扉が開くと同時に拳銃を手にしようとするも、その手はアッサリとすり抜けていった。普通の病院で着る服に着替えられていた。

「元気そうで何よりですね」

「…」

スーツ姿の少し老けた男性が眠そうに話しかける。

「いやあ、ほんと。行方不明の君が見つかってよかった、よかった」

「俺以外は全員死んだのか？」

「はい、そうですね」

「ふっ、日本は終わりだ。今の政府では世界に救援を呼ぶことも出来ない無能ばかりだ。だが…その前に俺がヤル」

「困りますよ、そんなことされたら。折角『カノジョ』にまた会えるチャンスがあるのに」

「…なんだと？」

「まあ、ここではアレなので。歩きながらゆっくり話しましょうか」

スッと後ろを向く彼に少し遅れつつも、点滴を引き千切り、取りあえず付いて行く青年であった。

部屋と同じように廊下も清潔で壁は白く電灯はＬＥＤで少し眩しいと感じるくらいだった。

「君は敵の数がどれくらいか、聞いたことはありますか？」

「…いいや」
「深海探査機の結果、１０００にも満たないそうです」
「は？」
「敵」の一人一人の戦闘力が駆逐艦一隻と同等であると教えられて訓練もその通りにこなしてきた。たった１０００人が相手なら例え日本でもここまで手こずるはずがない。
「戦艦クラスがいるってことか…」
「しかも彼らは海の中で生きてきたのだから、海中での潮の流れ、地形、戦略的で頭も良い」
たしかに、いくら艦隊の訓練をしようと、生身と波に揺れる船。
「完全にアウェーだったということか…」
「それでも戦うしかなかった」
「…原因は人間じゃないのか？」
「戦争の、ですか？」
無言、二人の歩く音が数秒続く。それがイエスの合図。
「私は日本人だと聞いています」
「…」
「君ぐらいの年の子が初めて見た深海凄艦に興奮して誤って発砲してしまったらしいんですね。しかもそれが運悪く致命傷となってしまったらしくて…」
もう笑うこともできなかった。運の悪い偶然がほんのちょっと重なったことが理由で俺たちは死ぬ覚悟で戦って、マリーは…。
「それで、本題はなんですか？まさか、こんなことを言いに俺に会いに来たんじゃないんでしょ？」
歩いていた足が止まった。気付けば丁度２ｍ位の大きな扉の前まで来ていた。質問に答えずにその扉をノックする。「は、はい！」と中から知らない女子の声が。
「さぁ、入ろうか」
ギィとそれらしい音を立てながら見えた部屋はまるで書庫のような場所だった。
「は、初めまして！この度、司令官の秘書を務めることになりまし

た。『吹雪』です！」
ビシィー！
学校の制服を着た、年は中学くらいの女の子がまだ慣れない手つきで敬礼をしている。事態が全く理解できなくて横目で助け舟を呼んでみるが笑って頷くばかり。俺にどうしろというのだ…。
「たしか～、吹雪君は『C』クラスだったね」
「はい、『C』クラスの代表役をやらせてもらっています」
何も理解できていないまま話が進んでいっている気がする。そもそも子供がどうしてここにいるのか。理由も想像がつかないでいる。
「吹雪君、そこのヘッドホンを付けてもらえるかな？」
「はい…？わかりました」
「適当に音楽を聞いといてくれる？」
「はぁ…了解しました」
ヘッドホンをして少しすると爆音のようなロックサウンドが漏れ出してきた。はじめ彼女は「ひゃあ！」と声を上げたりしたが何故かそのまま聞き入ってしまって「おお！」などと感嘆している。
「さてと…何から話したものかな…」
「とりあえず、彼女は誰なんですか？それもまだ幼いですし」
「ああ、言ってなかったね…」
その日、一人ベットから起きた時、何もかも全部憎んで目に入るものを壊したい衝動に駆られて、そのまま飲まれていたら、どうなっていただろうか。これから待っている無理難題に立ち向かい、もう一度「マリー」に会っていなければ、きっと後悔しただろう。
だから…どんな運命だとしても、俺は、受け入れる準備をしなくちゃいけなかったんだ。
「元深海棲艦だよ」

第三話

「はい、無事退院、おめでとうございます」
「…どうも」
５０は過ぎているであろう女性に素敵なスマイルで言われたところで、昨日聞かされた話を忘れることもなく、あれからずっと気分が沈んだままだった。例え若くて優しいお姉さんだったとしても変わらないだろう。
身体の怪我が治った本日から新しい仕事場で働くことになる。行方不明だった俺が生きていたことで、代理だった重森さんはココで清掃員として働くらしい。重森さんは俺に沢山の仕事を用意してくれた。というか一つも終わらせずに「提督」を譲ってきた。まだ来ていない娘やクラス分けもしなければいけなかったりと、やることが盛り沢山だ。
ゴロンとベットに寝っ転がって昨日の話を思い返してみる。
戦争が勃発した頃、密かに深海棲艦を回収して研究するための施設が建てられた。その場所がどこにあるのかは政府の上に位置する人物しか知りえない情報だという。このまま戦って勝てなかった場合、「敵」の弱点などが分かれば戦争で確実に有利に戦える。が、それと同時に彼らの遺伝子が人間と非常に酷似していることに目をつけた研究者等が、どうやったのか不明だが記憶の削除と共に人間に限りなく近い存在へと組み替えることに成功した。しかし、研究は思ったより大成功とは言えず、特に記憶については、ほとんど削除された者、深海棲艦の頃の記憶が一部残った者、そして、ほとんど残ってしまった者がバラバラに生まれ変わってしまった。これにクラスとして分ける時に使われるのが「A」「B」「C」だったのだ。
「A」クラスは深海棲艦の記憶がほとんど残った者、
「B」クラスは深海棲艦の記憶が一部だけ残った者、
「C」クラスは深海棲艦の記憶が全部削除できた者、
という具合である。
「A」クラスの娘は中身が深海棲艦だという程に人間を恨んでおり、

センソウ、デハ、ツカエナイ。
「B」クラスからは信頼関係が築ければ、センソウ、デ、ツカエル。
だがしかし「B」クラスは万が一記憶が戻った場合、裏切られる可能性がある…かもしれない。
なので「C」クラスは、安心して、センソウ、二、ツカエル。
…だからなんだ。俺にどうしろって言うんだ。重森さんから言われた今回の「提督」の使命、それは「戦争を終わらせる」こと。
はじめ聞いた時、吐き気がした。つまり、元とは言え深海棲艦同士で潰し合え、ということなのだろう。いかにも上に立つニンゲンが考えそうな作戦だ。いや、作戦と言うよりも、これはただの
「拷問だろ」
どれだけ、ため息をつこうが、「敵」は殺しにやってくるし、かと言って殺し合わせるのは絶対に御免だ。何とかして話し合いにまで持ち込めれたら、後は日本側が降伏でも何でもして、もうこれ以上、人や深海凄艦の流がす血で海を汚さないようにしなくては。握る拳は固く固く…いつまでも貧乏揺すりが止まらない足を殴る。グッと体を起こし、この部屋にサヨナラを告げる。俺の戦争は始まったばかりだ。

コンコン
司令室から以前聞いたことのある明るい声が返ってくる。そのまま開けて入ると事前に頼んでおいた書籍を高く積み上げて運んでいる吹雪がヨチヨチと歩いていた。非常に重いはずだが、細い身体の彼女達はいとも簡単に持ち上げれる。深海棲艦も生身といえど火力は侮れない、という視点で見ると吹雪なんかは同じだ。きっと他の娘たちも同様に戦闘も行うことが出来る…。
「ふう」
「お疲れ様」
「あ、司令官さん?!お疲れ様です」
「いや…まだ何もしてないけど」
「そ、そうですよねー、あはは…」

吹雪は照れたように頭を掻く。ほぼ初対面の男に少しでも気を使えることができるのは凄いと思う。そんな些細なことに勇気の旗がなびいて、そして胸の奥でギュッと音がした。
わざと負けるにせよ最悪の結果になるにせよ、
「頑張るしかないよな」
「？…は、はい！そうですね！」

コンコン
さっそく政治家様、暇様が来られたのか、と思い気休め程度に制服を整えて気を付けの姿勢をとる。
「失礼します」
心臓がこれ以上ないくらいに彼女の声に反応した。
「新しく鎮守府に配属されました、『古鷹』です」
そう言って敬礼するカノジョ。　俺は涙がこぼれそうな思いだった。姿は少し変わってしまったけれど声は確かに彼女のままで。
あぁ、もう会えないと思っていたのに…こんな形で…
「マリー…よかった…生きてて」
「すみません」
…ん？
「まり？って、誰ですか？」
ボロボロと崩れ落ちる音がした。高く積まれた資料の埋まっている中に『『古鷹』『C』クラス」と書かれてあることに気付くのは直ぐ後だった。

第四話

それから、難しい漢字が並んだ資料に目を通すも、提督はどこか上の空で仕事どころではなかった。戦闘訓練も初めは提督直々に指導するように言われているし、彼女たちが人間の生活に慣れるまで少し時間がかかるだろう。どこから手をつければいいか困惑している所へ、吹雪が一枚の電報を持ってきた。

「明日、総理ムカウ。盛大ニ歓迎セヨ…か」

「ど、どうしましょう」

司令室は足の踏み場も無い位に荒れ放題、小さな無人島にある鎮守府は建てたばかりだが、周りに生えた雑草の撤去のこともやらなければいけない。

「全員、グランドに集合するように伝えてくれないか？」

「は、はい！了解です」

バタバタと駆け出す吹雪の背中を見送った後、先ほどつい『「C」クラス』を付け加えようか迷ってしまった。左ポケットに入れている地下地図を上から手でなぞる。「A」クラスの娘たちが寂しい部屋に閉じ込められている。敵か味方か、判断するのはいつだって若い者たち。自分のことで落ち込んでいられない。両足に力を込めて前を向いて歩くだけ。窓の外で、しゃがんで草むしりをする艦娘の様子を一瞥して司令室を後にした。

この鎮守府にはエレベーターが何故か存在せず、長い階段を薄暗い明かりの中一人で文句を吐きながら降りて行くと開けた場所に出た。映画などで見受ける牢獄、そのイメージが今、目の前にある。

「やぁ、ココに来るの随分と早かったね」

「…重森さん」

どうしてここへ？、と言いたい気持ちを飲みこんで一歩、歩み寄る。

「探し物はコレかな？」

じゃらり、と取り出されたソレは、おそらく閉じ込められている部

屋の鍵。
「タダで譲ってくれませんか？」
「君の噂は前から聞いていたよ」
「…」
「凄いね、配属される部隊での輝かしい活躍、それも作戦成功率１００％なんて。学力もかなり高いみたいだし、将来は何でもなれただろうね」
「…何が言いたい」
「戦争に勝って欲しくないんだよ、私は」
　年齢を感じる顔の中に激しい闘士を宿した瞳を向けられる。
「じゃあ、俺にどうしてほしいんだ」
「彼女たちの幸せを」
　そう言って鍵を俺の方へ投げた。
「ど、どういうことだよ!?」
　手元の鍵から重森の方へ、ふと目をやると切ない表情が見て取れた。それはまるでキリストに懇願する弟子の様で、今にも土下座されそうな雰囲気を感じる。それに耐えきれなくなった俺は逃げるように「長門」と書かれた扉の前に立って鍵を開ける。扉に近付く前、すでに部屋から嫌な空気を感じていたが重森さんと対面するよりマシだろうとこの時は思っていた。

「くさい匂いだ」
「よ、よう。はじめましてだな」
　予想していた世界と違うというか、色々衝撃的で思わず動揺してしまう。中は外より明るく、布団も…というか一人部屋なのに二段ベットが置いてあるし。テレビだって薄型の物が備わってて、
「快適だなココは」
「人間が私の前で喋るな」
　長門と勝手に名づけられているが深海棲艦の時の名前もきっと憶えているだろう。でも、だからといって前の名前で呼ぶとしても他の艦娘への影響を考慮するなら「長門」と呼んだほうがいいだろう。

「なあ、お前の名前なんだが、何て呼べばいい？」
「喋るなといっただろう！」
「…」
「今、大事なところなんだ」
ピコピコピコ
彼女の手にはコントローラーが握られていて、視線はテレビ画面に釘付けである。どうしてこうなった。血生臭い展開を覚悟していた自分が馬鹿らしくなってくる。頭を抱えながら彼女のゲームが一区切りつくまで取りあえずその場に座って待っていた。
長門のほかに「A」クラスは今のところ三人いる。「那珂」と「暁」と「響」だ。重森さんに頼んで四人全員と話し合いたいと頼んだところ快く引き受けてくれた。
ちゃぶ台のような机を挟んで早速本題から突っ込んでみる。
「これから何がしたい？」
とあるゲーマーもどきは言った。
「戦争には興味ない。だが戦車ゲームには興味ある」
はい、次。
「那珂ちゃんはねぇ～アイドルになってみたいかも～」
今のままでも十分だよ、次。
「ハラショー」
日本語で頼みます、次。
「なんだか喉乾いたわ。何か持って来てよ」
長い溜息をついて頭を机につける。戦争に巻き込まれて仕方なく戦場に駆り出された彼女たちは幸か不幸か、またこうして命与えられて過ごしている。
「じゃあなんだ、人間のことは殺したいほど憎んではいないのか？」
「確かに仲間を傷つけたり殺されたら何倍にして返すが、コチラから進んで攻撃はしないことになっている」
「…そっか。俺ら人間が勝手に盛り上がってるだけか」
「だが、最近過激派が増えつつあるらしい。この前の日本軍壊滅はおそらく…」

目を閉じれば今でも思い出される傷だらけの記憶。俺の仲間が流した鮮血で汚れた甲板が目に浮かんでくるようだ。
でも、今の俺は、ただの船員じゃない。ここの鎮守府の提督だ。
もし仮に長門たちには内緒で他の艦娘たちを戦場に送ったとして、後でバレたらどうなるか、想像もつかない。だから長門たちに、今、決めてもらう。「敵」と戦うか、人間と戦うか、それとも…俺と共に戦うか。
「明日、一緒に総理を迎えよう」
「ちょ、ちょっと!」
重森さんが咄嗟に俺の左肩を強く掴んできた。それ以上はいけない、といった様子だ。だが俺だって選ばれた軍人だ。それなりの肝は持っていると、自慢ではないが自覚できているし、そのための力も持っている。
そして長門は、「わかった」と言って立ち上がり
「戦争が終わるのならば、この腕、どこまでも汚れてみせよう」
と声にした。その彼女たちの確かな決意が伝わって、ココに一人、更に固く拳を握る男がいた。

第五話

誰かが言っていた、特別なお風呂だと。吹雪はタップリ肩まで浸かりながら、あぁ確かに「特別」だ、という思いを噛み締めながら今日一日中した草むしりの疲れを取っていた。

「あーもう、泥だらけで嫌になっちゃう」

「泥だらけって…今日が初めてだったじゃん」

「あぁ…気持ちィ…」

吹雪の他に今は「叢雲」「漣」「五月雨」の三人が湯船につかりながら上がるまでの時間を過ごしている。つい最近、知り合ったばかりの彼女たちだけれど同じ使命を背負っている「仲間」としてそれなりに過ごせている。

「そういえばさ」

叢雲が思い出したように言う。

「提督ってどんな人なの？」

「あーそれ私も気になる」

「私も私も～」

三人に責められて少し困惑する吹雪だったが「そ、そうだねぇ…」と彼に会ってまだ数日しか経ってないが語り始めた。この時、提督＝変態という噂が艦娘の間で囁かれることとなるのだが、それは別の機会に。

十代の時以来の徹夜で身体の節々が悲鳴を上げていた。食事、休憩室、トイレ、全てのことに気を使っていたら時計の針がグルリと首を回して「おはよう」と挨拶してきた。まだ若いと思っていた、自分のことを。

「ふう…司令室の片付け終わりましたー」

「おう、ありがとう」

…古鷹。

そして本日より秘書艦を吹雪から代えさせてもらった。少しでも

顔の知っている娘が傍にいるだけで緊張する事態にもある程度落ち着いて話し込めると判断したからだ。それだけじゃない、彼女は見た目も大人びて見えるし雰囲気も柔らかいので今回の相手に良い印象を与えることができるかもしれないと思ったからだ。

ブロロロロロ

何処かで聞いたかもしれないヘリコプターの音がする。何度目か分からない深呼吸をしてテキパキと歩き出す。その後ろから古鷹が同じ速度で同じように歩いてついてきた。静かな嵐がすぐそこまで来ていた。

「お待ちしておりました」

総理はただ手を小さく上げるだけでキョロキョロと鎮守府を見渡していて目を合わそうとしない。

「君が例の英雄（えいゆう）かい？」

「…いいえ、人違いですよ」

「面白くないな。…ん？後ろの彼女はなんだい」

提督の後ろから顔を出すと古鷹は丁寧にお辞儀をした。

「彼女には今、秘書をやってもらっているんです」

「…まぁいい。では早速で悪いが君がいつも仕事している場所まで案内してくれるか？」

「もちろんです」

こちらへどうぞ、と今来た道を戻る。その間も総理はチラチラと辺りを気にしては小さな子供の様に「あれはなんだ？」と一つずつ質問されていった。そのため、司令室につくまで時間がかかってしまった。

中に入ると何名かの艦娘が敬礼をして待機していた。「A」クラスの方々である。

「意外と普通だな」

「これくらいが丁度いいんです」

そして立ち話を続けていた時、その言葉はこぼれた。

「本当に深海棲艦は迷惑だ。日本経済はようやく回復しつつある時に

喧嘩を売ってくるなんて、邪魔にもほどがある」
　その時、空気が大きく揺らいだ。瞬間、長門が殺意むき出しで総理に襲い掛かる。しかし事前に予測していたかのように提督が総理の盾になるように移動、その動きは互いに本物であった。提督の顔直前に拳、長門の顔直前に銃口を、それぞれ突き付け合う。
　そこをどけ。いいや、どけない。
　互いの視線が交わるところで冷戦が勃発する。そんな空気の中にもかかわらず総理は口を開いた。
「使えそうになければ棄ててもらって構わない」
　今度は誰一人動こうとしなかった、一人を除いて。そう、彼は拳銃を下ろして総理にこう告げた。
「いいえ、そんなことにはなりません」と。
　空気がまた大きく揺らいだ。
「どんな奴だろうと鎮守府（ここ）にいる以上、一人になんかさせません。戦闘に参加できないのなら裏でサポートをしてもらおうと思っています。だから…」
　一度深く息を吸って吐く。
「今回の作戦には全員が必要なんです」
　それを聞いた「全員」は提督の姿から目を離せず、その場に立ち尽くしていた。今の声を脳に焼き付けるかのように。
「…私は日本に明るい未来が訪れるのなら、どんな手段でも気にしない。が、万が一の時は…わかってるね？」
　日本にはもう抵抗する手段も持っていない。即ち、勝つか負けるかの瀬戸際がまさにココで、日本の、そして深海凄艦の未来は提督にかかっているのだ。もう、逃げることはできない。
　重々承知している旨を伝えると総理は忙しいスケジュールのため、短い挨拶を残して鎮守府を後にした。
「はあぁぁー」
　椅子に座って大きく空気を吐く。もしかしたら今日で全ての予定が牢獄行き後死刑になりかねない、という緊張感の中、常に気を張り

詰めていれば艦娘の前であるがだらけてしまうのは仕方ないことだ。
「料理、無駄になっちゃいましたね」
「ん？まあ、そうなるな。総理だって忙しい日程だろうし」
「だったら初めから用意しなくてよかったんじゃ…」
「…大人は面倒なんだよ」
　緊張していたのだろう、彼女たちもどこか疲れているような雰囲気が伝わってくる。が、まだ昼前、今日の鎮守府の予定が迫ってきている。
「さてと、放送室へ行きますかぁ」
「？何かあるの？」
「お、興味あるのかな？暁ちゃん」
「あ、暁ちゃん!?」
　そんなに子供じゃないわ！と、キレている彼女は放置しても大丈夫だろう。それよりこれから始まる訓練は危険が伴うのだ。最悪の場合、死者がでる。
　ピンポンパンポーン
「司令官より重要なお知らせです」
　鎮守府始まって以来の館内放送にみんなざわつき始めている。
「本日より実践訓練を午後一時から開始する。今回は特別にチームを組んで行う。チームは全部で三つ。サクラ、バラ、タンポポのいずれかに全員配属される。今から一人ずつ名前を呼んでいく。そして自分のチームごとでこの後食事をとりながらミーティング。時間が来たらグランドに集合、チームで固まって待機。それではチームごとに名前を呼ぶ。タンポポチーム、吹雪、叢雲、……」
　放送している傍で「A」クラス改めサクラチームのメンバーが騒がしくなってきている。それを聞きながらつい口元が緩んでしまう、が放送を続ける。
「そして気になる訓練内容だが…肉体トレーニングとだけ言っておこう。なので遊び半分でいると怪我をする。そして最悪の場合、命を落とすこともある。今回、初めての実践訓練だ。それなりの覚悟をしえくるように、それでは午後一時にグランドで会おう」